

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 5 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21520168

研究課題名（和文） SF ファンタジー・コンテンツの海外での受容に関する人文・社会科学の総合的研究

研究課題名（英文） Research on the International Reception of Japanese Pop Culture
研究代表者

長澤 唯史（NAGASA AWA TADASHI）

相山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：50228003

研究成果の概要（和文）：北米地域の研究および調査では、日本で流通するコンテンツがほぼリアルタイムに海外でも受容・享受されている現状が明らかになった。またインターネット利用者の多くを占める若年層においては、日本語はさほど大きな障害と考えられていない。日本のポップカルチャー・コンテンツは、普遍的なジャンルとしての地位を確立しつつある段階にすでに入っている。

研究成果の概要（英文）：On-site researches in Northern American Area (U.S.A and Canada) has revealed the situation in which Japan's pop culture contents are received and enjoyed without delay; Mainly they acquire information through internet where graphical interface can be supportive to non Japanese-speaking audience. Japanese pop culture has become conspicuous and popular throughout the world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,800,000	1,140,000	4,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：大衆芸術

キーワード：ポップカルチャー

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本のポピュラーカルチャーの代表的な分野として、アニメやマンガを含む SF ファンタジー・コンテンツが海外でどのように受容・評価されているのかについて、美学的・文化史的な分析評価と、法・政策・マネジメントのレベルでの議論が別個に行われ、学際的な連携が十分になされていなかった。

(2) 海外での日本のポップカルチャー受容は、比較文化論や美学的な観点からの研究対象

として、日本国内では十分に認知されているとは言い難いという状況でもあった。

2. 研究の目的

なぜ日本のポップカルチャーがこれほど世界中の若者を魅了しているのかを、現地調査や文献その他の資料に基づいて、法的整備やマネジメントの観点も加えながら検討すること、また海外の先進的な研究の成果を国内に紹介することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 海外における日本の SF ファンタジー・コンテンツの受容のありかたについて、主に現地調査およびインタビューを通じて、①～③の点を検証した

- ①海外でのコンテンツ受容の現状：人気作品・ジャンルの傾向、受容形態など
- ②人気作品の作品分析と受容者の受容傾向
- ③具体的な受容・享受の現状についての調査・分析

(2) 日本の SF ファンタジー・コンテンツの美学的・文化史的文脈から、文献等を元に情報を収集し、再検討を行った。

- ①海外での受容・研究の成果の検討
- ②日本人の視点からの日本の SF ファンタジー・コンテンツの再評価

現地調査については、長澤と研究分担者の立岡で、以下のように分担して行った。

- 2009年度：アメリカ・カナダ（長澤）、欧州（立岡）
- 2010年度：イギリス・アメリカ（長澤）、欧州（立岡）
- 2011年度：ニュージーランド、オーストラリア（長澤）

2009年度と2010年度は、以下の海外研究者へのインタビューを含む。

- Christopher Bolton（米国・ウィリアムズ・カレッジ准教授、現代日本文学・文化研究）
- Thomas LaMarre（カナダ・マギル大学教授、日本文学・文化研究）
- Susan J. Napier（米国・タフツ大学教授、近現代日本文化研究）
- Larry McCaffery（米国・サンディエゴ州立大学名誉教授、現代文学・文化研究）
- Sinda Gregory（米国・サンディエゴ州立大学名誉教授、現代文学・文化研究）

4. 研究成果

(1) コンテンツ受容の手段

長澤が主として行った北米地域の研究および調査では、日本で流通するコンテンツがほぼリアルタイムに海外でも受容・享受されている現状が明らかになった。その主な流通経路としてはインターネットの普及によるところが大きい。例えばカナダで発行されている『Protoculture』という日本のアニメ、マンガに関する同人雑誌は、次シーズンの新作アニメ、最近人気の連載マンガなど、ほぼリアルタイムで日本の情報を掲載している。

またこれまで言語の壁が文化輸出に際しての大きな障壁と考えられていたが、インタ

ーネット利用者の多くを占める若年層においては、GUIを備えたコンピュータが直感的な操作を可能とするために、日本語をさほど大きな障害と考えていないことも重要な要素である。

一方、立岡が担当した欧州地域の調査では、民間ではなく政官主導でのコンテンツ産業育成・保護が主流であることが明らかとなった。日米の民間主導での産業発達と比べ、規模は小さいもののコンテンツの権利保護などの点では優れた成果を上げている。

最近問題になりつつある東アジアでの不正利用や海賊版等の問題に対処するための一つのモデルとして、今後は欧州型の法制度の整備が必要である。

(2) 人気コンテンツの傾向

さらにそのコンテンツについても、大手メディアや企業による商業作品にとどまらず、コミックマーケット等のみで流通している同人作品がすでにポピュラーになっており、旧来のメディア／コンテンツ産業はすでに立ち遅れつつある。

主に欧米での人気作品と受容傾向を精査してみると、幼児を含む年少者のあいだでは「ポケットモンスター」「ドラゴンボール」「BAKUGAN」など、日本でも人気のコンテンツが主流である一方、ティーンエイジャーになると最新の作品から同人作品まで、マニアックな享受が目立つようになる。

中村&小野（2006）のような、旧来のメディアと流通に基づいた分析は、市場中心主義の限界や新たなデジタルコンテンツと流通のあり方への理解不足が浮き彫りとなる結果となった。今後のポップカルチャー受容については、コミックマーケットなどの巨大な同人市場も含め、アニメ、マンガを中心とした新たな文化ジャンルに展開していることを念頭に置かなければならない。

(3) 今後の展望と結論

一方、日本のマンガ、アニメはすでに一つのスタイルとして認識されており、日本からの輸入作品に加えて現地（北米）の作家による創作もかなり広範囲に行われている。また中国や韓国からの輸入作品も、日本とは比較にならないくらいに流通している。日本のポップカルチャー・コンテンツという枠を超えて、普遍的なジャンルとしての地位を確立しつつある段階にすでに入っている。

海外のアニメファンが日本語の歌をインターネットの動画サイトで配信する現象が近年当たり前のものとなりつつある。これはここ2、3年で顕著になった現象であり、これまで日本の音楽が海外に展開することを困難にしていると言われてきた「日本語」という障壁が、軽々とクリアされている現状が

そこにはある。また 2011 年の夏にはトヨタ自動車の北米向けのテレビコマーシャルで、「初音ミク」というボーカロイド（架空のキャラクターに歌を歌わせるコンピュータソフト）のキャラクターが登場し、最近では Google のテレビ CM でも採用されるなど、こうした日本のコンテンツが音楽をも包含しつつある状況も明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

- ①長澤唯史、外傷という様式：ノワール・ホークス・ヘミングウェイ、ヘミングウェイ研究、査読有、第 12 号、2011、3-15.
- ②長澤唯史、音と意味、ことばと文字—サザンオールスターズ以降の日本語ロック／ポップス、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部言語と表現—研究論集、査読無、第 8 号、2011、1-6.
- ③Tadashi Nagasawa, NASSS Literature and Culture Section Workshop I: Summary of Discussion. Nanzan Review of American Studies, 依頼原稿、Vol. XXXIII, 2011, 217-219.
- ④Tadashi NAGASAWA, Akitoshi Nagahata, Summary of the NASSS International Graduate Student Seminar: Literature and Culture Workshop, Nanzan Review of American Studies, 依頼原稿、Vol. XXXIII, 2011, 275-277.
- ⑤Tadashi NAGASAWA, Review of *Sublime Voices: The Fictional Science and Scientific Fiction of Abe Kobo. PARADOXA*, 査読有 No. 22, 2010, 139-146.
- ⑥Tadashi NAGASAWA, et.al. Interracialism in the American Literary and Cultural Representation: Surveys and Prospects on the 21st Century. *The Journal of the American Literature Society of Japan*, 査読有、No. 8, 2010, 100-102.
- ⑦Tadashi NAGASAWA, Akitoshi Nagahata, Summary of the NASSS International Graduate Student Seminar: Literature and Culture Workshop, Nanzan Review of American Studies, 依頼原稿、Vol. XXXII, 2010, 245-247
- ⑧Akitoshi Nagahata, Tadashi Nagasawa, Summary of the NASSS International Graduate Student Seminar: Literature and Culture Workshop, Nanzan Review of American Studies, 依頼原稿、Vol. XXXI, 2009, 257-259

〔学会発表〕（計 5 件）

- ①長澤唯史、「ニューオーリンズの『二重意識』—セカンド・ライン、ディキシースランドと R&B」、日本アメリカ文学会中部支部大会シンポジウム、2011 年 4 月 24 日。
- ②長澤唯史、「外傷という様式：ノワール・ホークス・ヘミングウェイ」、日本ヘミングウェイ協会シンポジウム、2010 年 12 月 12 日
- ③立岡浩、「著作権法とは？～デジタル時代、初めて学ぶ方のために」、中小・ベンチャー企業のための 2010 年度・京都発・知的財産セミナー、2010 年 11 月
- ④長澤唯史、「音と意味、ことばと文字—サザン以降の日本語ロック／ポップス」、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部国際文化フォーラム、2010 年 6 月
- ⑤長澤唯史、「“Queer is Pop”：Race と Sexuality の共犯関係とその転倒」、日本アメリカ文学会第 48 回全国大会シンポジウム、2009 年 10 月 11 日

〔図書〕（計 2 件）

- ①立岡浩・川村匡由・桜井政成・千葉正展編、『福祉サービスの組織と経営』、久美出版、2010
- ②立岡浩編、『映像コンテンツの NPO と PPP の権利管理及び関連する振興政策と協働経営の国際比較研究報告書』、文部科学研究費補助金・基盤研究 C・一般・研究成果報告書、2009

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

- ①長澤唯史、新聞書評：「三崎亜記著・廃墟建築士」、「平野啓一郎著・DAWN」、「スティー

ブ・エリクソン著・エクスタシーの湖」その他、全14編、時事通信社より配信、2009-2011

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長澤 唯史 (NAGASAWA TADASHI)
相山女学園大学・国際コミュニケーション
学部・教授
研究者番号：50228003

(2) 研究分担者

立岡 浩 (TACHIOKA HIROSI)
四天王寺大学・経営学部・教授
研究者番号：40301650
(H21、H22→H23 連携研究者)

(3) 連携研究者

なし。